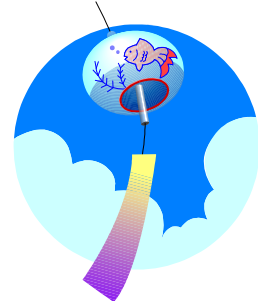


巻頭言

吉田 正生



『夢さ志』の巻頭言を書くのは、これで何度目になったでしょう。きちんと数えればわかるのですが調べている余裕がないので、ゼミ誌係が編集後記などに書いてくれればと思います。

ただ、もう今のゼミ誌係ではわからないことを、一つだけ書いておきます。

『夢さ志』は、もともとは CD として出発しました。北海道教育大学旭川校にいたときにもゼミ誌を作ってもらっていましたが、ゼミ誌づくりにかかる学生の苦労はよくわかっていました。旭川校の学生たちは皆、大学まで長くとも 1 時間あれば来られました。「首都圏の大学生というのは、下手をすると 2 時間近くかけて大学にやって来る。1 時間半かかるというのはざらという状態なのだ」というのが平成 22 年夏までに私がつかんだ文教の学生の実態でした。

また、旭川校の社会科専修は 1 年生のときからゼミに分けていましたから、ゼミ誌作成は 2 年生の仕事になっていました。2 年生は 3 年生に比べればずっと暇です。ですからゼミ誌作成に多くの時間をかけることができます。それに 1 年生から 4 年生までゼミの中の縦のつながりがしっかりしてましたから、上の学年、下の学年が 2 年生をいろいろなかたちでサポートしてくれました。でも、文教では同じゼミに 3 年生と 4 年生しかいません。4 年生は教採、卒論と一生を左右するような事を抱え込んでいます。必然的にゼミ誌作成は 3 年生の役割になります。しかも 3 年生はゼミ誌作成の経験を持っていないのです。

それで考えました。3 年生の負担を減らすには、プリントアウトして冊子にするということを経験せずに CD にすればいいと……。

でもある年度の学生たちが、力を合わせて今のような冊子にしてゼミ誌を作成してくれました。文教でもできるんだと目を開かれ、それからずっと冊子形式で作ってもらっているのです。

ゼミ誌係はたいへんだと思いますが、みんなで力を合わせて、ぜひよいものを作ってください。昨年度のゼミ誌係、ほんわかしている人だったので大丈夫かなと思っていましたが、歯を食いしばって（でも、どこことなくホンワカムードを漂わせて）、みんなと力を合わせてよいものを作ってくれました。そういう学生たちのがんばりに、このゼミは支えられているのだと思います。

これからも力を合わせてよいゼミにしていきましょう！

以下、今、書きかけている論文の一部を紹介します。論文をだんだん書いているうちに、変わるかもしれません。特に「はじめに」はそういうものだと思ってください。みなさんが、社会科教育の研究ってどうやるのか、参考にしてくれればと思っています。歴史学者に歴史学者固有の研究対象があるように、われわれ教科教育研究者には教科教育研究者独自の研究領域があります。その領域は、実はみなさんが教員になってもやる気さえあれば、続けられるところなのです。やる気、元気、根気。この 3 つが人生を分けるかもしれません。新井白石は、「利根（利巧か）、気根（根気強いか）、金根（勉強するだけの金があるか）の三根を学問という道に生きられるかどうかの判別規準にしていたが。

「社会科伝統・文化学習」の転回と構築



はじめに

平成 18 年 12 月 15 日、第 165 回臨時国会において新教育基本法が成立し、12 月 22 日に公布・施行された。これを受けて平成 20 年 3 月に出された学習指導要領は、「伝統と文化に関する教育」を「重点事項¹」の一つとした。その結果、各教科・領域で「伝統と文化に関する」教材や授業の開発が従前以上に行われるようになった²。社会科もその例外ではない。本論は、こうした動向を受け、社会科における「伝統・文化」の学習（以下、「社会科伝統・文化学習」）のための授業開発を行おうとするものである。この時、次の二つのことを基軸においている。一つは、習得される知識の学的質の向上を図ることであり、今一つは知識の実践性を図ることである。

後述するように、「社会科伝統・文化学習」はすでに社会科発足時にはあったし、またその必要性が言われて久しい。しかし、美術史や文化史の成果あるいは日本民俗学などの成果のなかから、日本人として必要な常識・教養と思われる事項をピックアップして、それを教えるだけでよいのであろうか。

小学校の場合、多くの社会科実践は、たしかにそれを乗り越えようとしたものになっている。しかし、社会科が社会認識教科である限り、また新学習指導要領で社会参画が強調されている以上、文化という視点から社会を理解させ且つ社会参画力を育成する——このような学習内容を基軸に据えた単元を構成する必要があるのではないか。これまでのところ、こうした視角からの授業開発は不十分だと思われる。

現在、小学校でみられる「社会科伝統・文化学習」は、大きくは次の三つに類型化することができる。「共感的理解型」、「意思決定力育成型」、そして「教養—鑑賞型」である。

「共感的理解型」には、二タイプある。中学年の地域学習に見られるものと高学年の歴史学習に見られるものである。中学年に見られるものは「伝統・文化」の担い手や継承者の技が如何にすばらしいか、そうした技を受け継ぐために（あるいは次の世代に伝承するために）どのような工夫・努力がなされてきたか、これらを情報として与えた上でさらにそうした工夫や努力の底にある（と授業者によって設定された）担い手たちの利他的心情や使命感を共感的に理解させようとするもの乃至はそのバリエーションである。高学年の歴史授業に見られるものは、奈良の大仏などの文化財を取り上げ、こうした文化財を作らせた為政者の思いや願いはなんだったのかに迫らせようとするものである。小学校の場合、学習指導要領（社会科）が「共感的理解型³」である故に、これに分類し得る授業実践は多い。また、これからも同様の傾向を持つものが日々、再生産されていくであろう。特に中学年の実践の場合、地域の伝統・文化を継承している個人を取り上げ、この類型の授業が行われていく可能性は大きい。

¹ 中村哲（編著） 2009 『伝統や文化に関する教育の充実 その方策と実践事例』教育開発研究所、p.3。

² こうした動きは、たとえば次の 2 冊によって掴むことができる：人間教育研究所 2008 『伝統・文化の教育 新教育基本法・新学習指導要領の精神の具現化を目指して』金子書房；安部崇慶・中村哲（編著）2012 『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』風間書房。

³ 「働く人」の仕事上の工夫や努力（そしてその底にあるとされた利他的な心情や使命感）、また歴史的人物や先人の地域形成・国家形成・文化形成上の工夫や努力（そしてその底にあるとされた利他的な心情や使命感）を共感的に理解させようとする単元構成になっているものを「共感的理解型」と呼んでいる。

「意思決定力育成型」は、「共感的理解型」が「伝統・文化」は受け継がれるべきものであるという前提に立った授業構成になっていることを批判的に見るところから生まれる。したがって、自分が住む市や町などで行われているお祭りや芸能などを、これからも残していくべきかどうか、それを子どもたち自身に検討させようとするパターンの実践が多い。さらに受け継ぐべしという選択肢をとった場合、現代に合わせてどのような創造的変化を「伝統・文化」に加えていくべきか考えさせるというプランもある。

「教養－鑑賞型」は、小学校高学年以上にみられるものである。特に、中学校・高校の実践に多い。これは次のような知識の習得をめざしている：①由来に関する歴史的知識（いつ・だれが・どのように創造したのか；なぜ・どのように今日まで継承されて来たのか）、②影響に関する知識（どのような文化的影響を後世や外国に与えたのか）、③評価に関する知識（それはどんなに高く評価されてきたか）。本論では①・②を教養と呼び、③を鑑賞と呼んでいる⁴。

こうした従来からの「社会科伝統・文化学習」では、文化の歴史学や文化の社会学⁵が問題としている「社会構造－文化」の関連についての学習（以下、「社会構造－文化」関連学習）が欠落している、あるいは浅薄なのである。本論はこの欠落を埋めようとするものである。

だがここまでなら、それは知識の質をより学的なものにしようとするだけの変革である。学習指導要領において社会参画が強調されたことを受け止めて考えるべき知識の実践性をめぐる問題は解決されていない。したがって、伝統や文化の継承・維持・発展のために社会に働きかけるにはどうしたらよいかなど、実践的知識・技能の習得をも射程範囲に入れた授業モデルを開発する必要がある。これについては「社会参画学習」論⁶に拠る。

「社会参画学習」を歴史学習に組み入れることは可能なのか。「社会参画学習」は公民や地理でしかできないのではないのか。本論は、小6歴史人物学習の教材としてフェノロサと岡倉天心をとりあげ、この課題にチャレンジしようとするものでもある。

そこで以下、本論を次のように構成する。

先ず、小学校学習指導要領（社会科）において、伝統や文化の学習についてどのようなことが言われて来たのかを分析する（Ⅰ章）。次に先行実践や先行研究を取り上げ、Ⅰ章と同様に分析する（Ⅱ章）。Ⅰ章及びⅡ章から析出された先行実践等の問題点を乗り越えるのに、学的な知識の習得という観点からすると、「社会構造－文化」関連学習が如何に有効であるかを論述し（Ⅲ章）、さらに社会に働きかけるための実践的知識・技能の習得を単元計画の中に如何に組み込むかについて授業モデルというかたちで提示する（第Ⅳ章）。最後に成果と今後の課題について述べる（おわりに）。



⁴ ①の中の「なぜ継承されて来たか」の答えが「すばらしいから」というものであれば、それは③の鑑賞ともつながっている。

⁵ ここでは個々の作品や論文ではなく、そうしたものを分析したり整理した論文集を1冊ずつあげておく。文化の歴史学については、Lynn Hunt(ed.), *The New Cultural History* (University of California Press, 1989)。文化の社会学については、Diana Crane(ed.), *The Sociology of Culture* (Blackwell Publishers, 1994)。

⁶ 吉田正生 2013 「小学校社会科『社会参画学習』の授業プラン」、社会系教科教育学会『社会系教科教育研究』第25号、pp.11-20。